

# 疼痛を訴えやすい学生の心理学的傾向

## - 失感情症と疼痛有訴数字の関係性 -

○荒木誠一<sup>1)</sup>、岩瀬泰介<sup>1)</sup>、佐々木重昭<sup>1)</sup>、吉田啓英<sup>1)</sup>、高橋勇二<sup>1)</sup>、玉井清志<sup>1)</sup>、樽本修和<sup>2)</sup>、安田秀喜<sup>1)</sup> (1) 帝京平成大学)

key words : 失感情症、養育、感情同定困難、心理学、疼痛

【はじめに】接骨院などの代替医療施設には、疼痛を訴えて来院する患者がいる。このような疼痛を訴える患者の中には、検査により明らかな器質的な疾患が見つからないことがある。器質的な疾患がないにも関わらず疼痛を訴える患者は、十分な治療を受けられないことがある。心身症患者を観察してきた Sifneos は、心身症患者が自分自身の率直な感情や葛藤を認識し、「気づく」ことができず、自分の内的な感情を表現し言語化することが苦手であり、空想力や想像力が乏しいといった特徴を有しているのではないかと考えた<sup>1)</sup>。そして Sifneos は、このような特徴の人を alexithymia (失感情症) と提唱し、心身症患者の特徴として考えた。失感情症傾向のある人は、自分の気持ちや思いについて注意を向けたり、話そうとしたりはせず、自分の生活環境や仕事環境などを客観的に話すことが多くなる<sup>1)</sup>。Taylor らは、感情同定・表現(自分の感情状態の「気づき」と「言葉での表現」)がある一定のストレス発散作用を果たすが、失感情症では、ストレスが言葉で発散できないので身体の症状として表現されることになり、心身症につながるのではないかと報告している<sup>2)</sup>。自分の感情に気づけない、気持ちを言葉で表現できない失感情症は、親からの被養育体験が影響していることが考えられる。九州大学がおこなった40歳以上の先行研究の結果では、失感情症と被養育体験が疼痛に関係があると報告している<sup>3)</sup>。しかし各年齢層によっての検討が見当たらなかったため、今回われわれは、若年者である大学生を対象とし先行研究と違いがあるのではないかと考え、疼痛と失感情症や被養育体験との関係性を調査した。

【方法および方法】対象はA大学の3、4年生127名、男性98名、女性29名、平均年齢20.7歳とした。調査項目は、①疼痛の有無とその部位・期間、②失感情症(Toronto Alexithymia Scale-20 : TAS-20)<sup>4)</sup>、③両親の養育態度

(Parental Bonding Instrument : PBI)<sup>5)</sup> ④利き手の自己式質問紙調査を行った。

【結果】疼痛を有する人は、72名(56.7%)で疼痛継続期間は平均45か月であった。疼痛部位は、腰痛が最多で有訴率は38%であった。痛みを有する事と失感情症の「感情同定困難」とには、有意な正の関連を示した( $P<0.05$ )。PBIのうち母親の養育因子の低さは、疼痛を有する事と、有意に相関していた( $P<0.05$ )。また、左利きの人が有意に失感情症の「感情同定困難」が高くなる傾向が認められた( $P<0.05$ )。

【考察】今回の結果から失感情症が痛みに関連することが認められ、国内外の様々な先行研究と一致した。また幼児虐待や不適切な養育を受けると、大人になって身体愁訴を訴えやすいという研究報告がある。このことは、母親のケアが低いことが痛みと関連するという今回の結果を説明する機序として成り立つと考えた。失感情症などの心理学的な要因を把握することは、柔道整復術の治療効果を高める可能性が考えられる。本研究は大学生を対象としたため、代替医療施設に通院する患者へ適応するには限界がある。今後は患者を対象として疼痛と失感情症の関係性について検討したい。

### 【文献】

- 1) Sifneos, P.E., The prevalence of 'alexithymic' characteristics in psychosomatic patients. *Psychother Psychosom*, 1973. 22(2): p. 255-62.
- 2) Taylor, G.J., *Psychosomatics and self-regulation*. 1992.
- 3) Shibata, M., et al., Alexithymia is associated with greater risk of chronic pain and negative affect and with lower life satisfaction in a general population: the Hisayama Study. *PLoS One*, 2014. 9(3): p. e90984.
- 4) 小牧, 元., et al., 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale(TAS-20)の信頼性, 因子的妥当性の検討. *心身医学*, 2003. 43(12): p. 839-846.
- 5) 小川雅美, PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. *精神科治療学*, 1991. 6(10): p. 1193-1201.